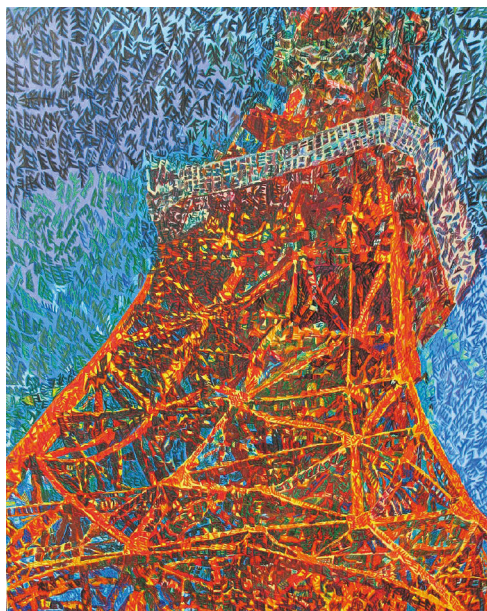


アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

6

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「^き生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「東京タワー」

(2014年 技法：パネル、紙、色鉛筆 H1167mm×L910mm)

撮影：大西暢夫

アール・ブリュットのささやきと看護

東京都看護協会 会長
山元恵子

2019年4月に西新宿に移転した東京都看護協会会館に、アール・ブリュット作品を展示している（2020年8月まで）。アール・ブリュットの作家は、見られることを意識していない。彼らの内面世界の発露が、結果、“アート”と呼ばれ、私たちの前に置かれる。そこに意図は存在しないが（しないからこそ？）、見る側の何かが刺激され、自分への問いが生まれる。

患者の言葉や態度といった表層に捉われることなく、内面に近づこうとしているだろうか。その人の内に潜み、込み上げようとする力を引き出す準備はあるだろうか。

「自分自身はけっして感じたことのない

他人の感情のただなかへ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである。（中略）看護師のまさに基本は、患者が何を感じているかを、患者に辛い^{つら}思いをさせて言わせることなく、患者の表情に現われるあらゆる変化から読みとることができることなのである」¹⁾。こう語ったのはナイチンゲールだ。

特に日本において、アール・ブリュット作品あるいは作家は、看護師や福祉に携わる人によって発掘されることが多いと聞く。そこには、ケアの対象に向けて感性の窓を大きく開いている人たちがいる。作品や作家を巡る営み全体が、私たちにに向けたメッセージであるように思う。

今月の作家

木村全彦 Masahiko KIMURA

1984年生まれ／京都府在住

木村は、通所している支援施設で創作を行っている。描かれる題材は大相撲、お祭り、東京タワー、写楽などさまざまで、雑誌や図録などから選んでいく。描画は極細を捉える視野で行われ、まるでフィルムカメラのように木村の絵もまた光の粒を捉えている。また、幾何学模様を組み合わせることによって陰影や紙面の奥行きも含め立体的で躍動感に溢れている。

（解説：小林瑞恵）

企画協力：NPO法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト

引用・参考文献

1) フローレンス・ナイチンゲール著、湯横ますほか訳：看護覚え書—看護であること看護でないこと 第7版。現代社、227、2011。